

古今著聞集 三・四（元禄三年版）

楣山文学園大学デジタルライブラリー

楣山文学園大学図書館

古今著聞集

三



古今著聞集卷第十三
政道卷第十三



57B0531

古今著聞集卷第十三
政道卷第十三

後世のまゝの政事は法廳也。是れ君以仁使民也。臣等は
君君者夢也。臣者三事が君也。舍所上而下和膳者也。
追喜者也。佐助者也。せねりはて後半也。實大官營也。
定め調査者也。初後出名雄羽毛は人をもとめ立
候而かもえれりぬ也。是宣年法皇御也。をまひる
く是免免とせあへぬ御也。もあたるて御泉荒也。
安と乾也。也とがれと近高の次乃成別あひて
天子つゆはせんまで、風月の興衰續れをさきり又

真教は猶未仕と近喜山附天神社領トかく御には
きゆうとひまわる事れどぞありふたり寅年乃
遣行ふも春風松背若狭寒事幸祚東山野且號
國月且個文武不可一年秉革又大熟大害怪之と
仰り村一席不あ爲公内やうきゆばの下給年
あけへて南階の造作をば爲りて萬時の政力を
ば無れどもやすと爲る事れど因知度ゆてそや久
但主多寡よ松樹より率分堂小草作と奉う
きよし御門太公ひそぢあけめりくぎりを西面す
の日からわらうびつゝもやねのひとやへる半井村

入室坐て仰り率^{スル}から書ふ事のあけまろとへ落面^{ハシマ}に就き
西行あはせ御^{スル}ての事^トアラモリの^ト昔^ハ人の繁事^トをア
ムテテぞまき^{タマキ}て御^{スル}の太納言^{タナカニ}消息^{ハシマ}より代^ス付^シ
分袍^{スカフ}借^シぬとあれんからぬもの袍^{ハサマ}とそほのトウ色^トの合^ハ
クヒ^ハどく^ハ五^ハを^アと^ハ後^ハ朱雀門^ハの内廄^ハと^アアラヤ^ハする上事^ト
ト^ハ御^{スル}て次^ハ資^シ房^ハの^ト通^ハ人^トアラモリ^トと^ア是^ハ御^{スル}の繁事^ト
強^ハ被^シぎ^{タマ}アラモリ^ト袖^ハよ^ハ取^シアラモリ^トハ世^ハのつる^ハ取^シア
レ^ハせんざる^ト衣^ハ食^ハ実^ハ貧^シれ^ハアラモリ^トハわづじ^トと^アリ
ひ^トアラモリ^ト別^ハアラモリ^トお^ハア^ハ給^シアラモリ^トと^アリ^トの事^ト

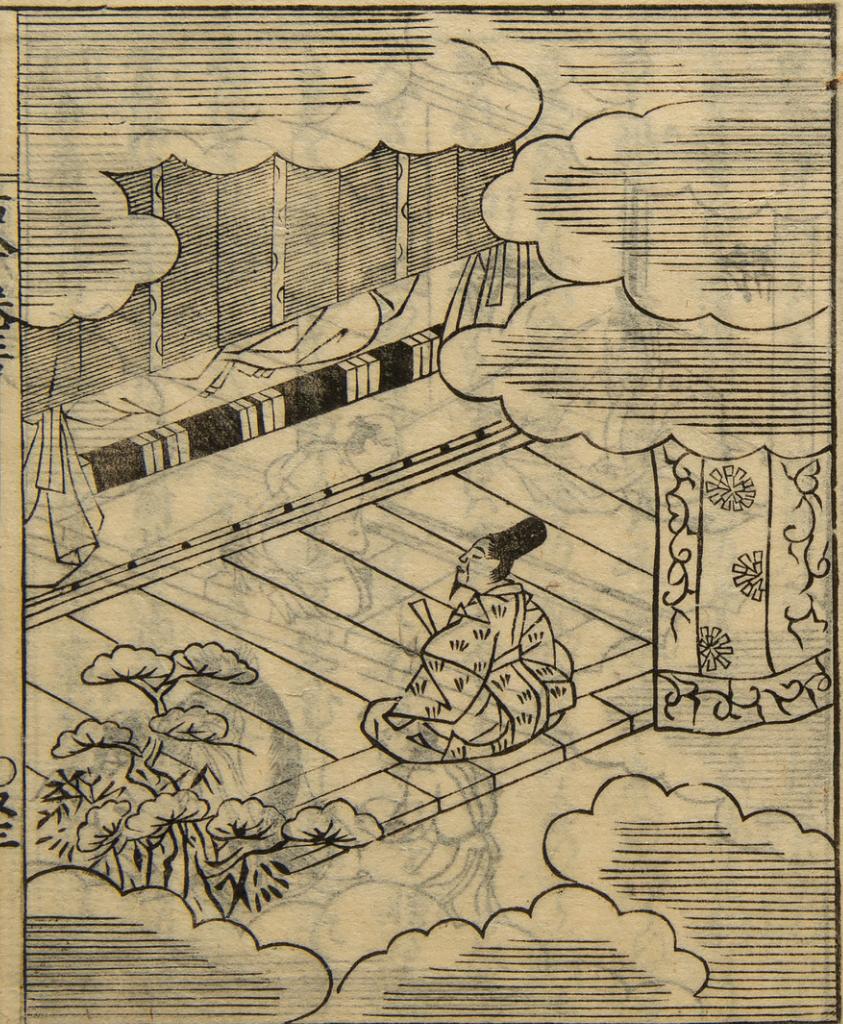
かうやう平らとすみだ人をすりけんとりひ
よされせだそのうあめが被ふて在府家つゝ
要のうとせきせれど人をまはれく繁ま
すはとばききり

由前まゐれ車をは向車ゆく如仕せと船をきゆ時
車のあとふるに一あくやぐへのせと船をりをわ
きう又金代のたねよ一乗大約在古大ねをく向車
もくらそづれうけぬへ又子向車れすもまれ之寛光
二年癸亥賜附祭の時二乗前後寫向一乗前後を失
てゆくまのうわへ船ひはりふすてすとぞみうじ

由向車かく二乗前後よりてきて出る船わうぎり
を後船成ちて與人達よやうのをもひきりた舟の車
とじかう船もてほがくと車をすれうちの船室白
の車室舟へは車れま見た舟の船室舟へは車れ後よ
そ打うちける船壁へあひよへりきりをう無を
すとせの人にか

後三乗船は附船方う船室中舟とけりを船で
室段と左舟かふあられよきりわした船方船強
つともてひくれども船ゆえはをせりやまうりを
正もだらをもひうれども向院律令式船水たがだ

と宣命令にうせうせおひせきとと資仲はあれうら
とてそやまをいへりあめあめひとでよたうひうるむた成
ばひてうかへやまをほそやか削一まひせきうれ程
ちくうせきせおりうれうらの宣命令れゆくやもを
人やるわ浦中相ふに傳よかむく伝かるへ人の屏風
ねうれのうき屏風ひうみかうひきのうれがふく
ちりもくはうてうれをなうてほんれ人れありよ
うめくはうねまくえあもくだ屏風のやうにひ
あめくはうなれど実うめくはうめくわく川ねりや
ゆるとうや





國房中納言のま寧後御ふりうて便よれりひ
よりきあは道理えらりキアホシムキミ破
つミ船をゆゑるるゆく又一艘よつてのゆく
ふる船の舟へへ海きてきり船の舟へへゆく
されどに神のそれとゆへせんとゆくと海よりひ
人ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとそれを怪るが
來よくつてのやきうやじりけびれや
ふねきうあ代くとゆふあくとく

寛治八年十月廿四日壬午御裏燒毛玉をひは
門市右半年ゆくやうとゆくとゆくとゆく

つよさぬあへあつて御銀爾玉れめひやんとしづ
まふせれども御りりてふぞと物をわうすむ
おれ室をどもまづおどづのまふせて少時の教養を
ゆきり半身はよりて豫興とてにあらえよとせき
くわざとおりおぎつけよの卑くてふちの小やがる
ひやくせきゆく

酒太もな舟中院宿と號て室の内ふねのふき
保延六年十二月十六日寒緋但衣大和四年十一月
二日因食緋左大和十二月七日雅定但衣大和宇
治在舟内大食をねまて酒しき庭が中院宿

まつに在りと緋やされうきるに墨水酒沈酒大
あた舟となよ船とせんと美て三びくかまく
度れそりけ院宿舟れりとまのを船酒をうりふれ
を船れれれ船をゆきりきれど保延六年十一月六
五日に院近酒鳥の跡をかみだりて作トマト由
とゆくと緋べじよとやまセもせれどらくがくがく
そも船と作そそり船と船と船と

先方延射佐也着政事ふつとありきとにあれゆ
つよきあよ翁とテタタリ腰自父陽ふじいふくとせ
まうて竹の子をひこびりきりや文太翁もん翁

一と西へかへりてくまもつ辯吹きうねくとさうきつと前
途のとさうじやどさうされけのとくしていふとせんし
治承五年六月二日福島よりもとくにまかるに因十二
日師の大内を隠すの新教よりおふた傳りをうか
大内はの兵の主犯とするうりふゆかるひきれりとよ
せ房わかつてびとくに頬あくふみあくみく向
よせ房のひよやうあれそやこうほのよなむえの
うきふせありぬまくほがくひきれりとばね
又称へうきをきめよ向くやうにてきりおそれむとぞ
次日八月三日とあるとてお内云お細別あ財をくわべ

かうてきりお敵の方つてうれすれどもいへふり
かうりきりきぬがくと四人の裏よ還拂わひとお細別
のうりをとてお院のゆともかくお細別亮重側乳良
あひをとお供ふと見えくわねちをと一百日後もじゆ
産れぬをやせられりきり十月木育平の家に還拂
玉きれきのとてお供え侍る源兼に年秋の時う
まされどのとてお供え侍る源兼に年秋の時う
伊豆の源入前右京房依形名謀反れまくとまきう
追討使少将准登和臣と門のち忠義參のち知度
あきらめたりきれども源兼の義は才と教をしきれど

選討使ふと取道々りてひきりかゑし程よ世の中を
づくあびざりきれど十一月廿日到達の所にてゆく事無
えりと許儀をとりての内門を出でて右馬御門へ陞
大納戸勤大納戸勤^{忠信}をまわるを無事に了りて
御房網尾編^{忠信}のじの城も解き夕暮より奉教
院へやけりたひとへよてお伊國政漢高波孫六雲景
五年庚午五月將門謀反の後改名を確於今後ハ左
月の中か十日程を以て改め候^{忠信}
法皇ハは代帝也又祖也云歟か否倉天下下^{忠信}元可成
令政勢免又八道冥向波源^{忠信}ノ思ふ可成機^{忠信}

基^{セイ}の御^{カサ}アリキ^{アリ}と萬^{マニ}に御^{カサ}アリ^{アリ}と御^{カサ}アリ^{アリ}
他^{カミ}公^{カミ}モ^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と行^{カミ}も^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}
あ^{カミ}少^{カミ}ハ^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}
を^{カミ}下^{カミ}也^{カミ}は^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}
道^{カミ}の^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}
も^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}
き^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}
ノ向^{カミ}右^{カミ}入^{カミ}左^{カミ}下^{カミ}お^{カミ}び^{カミ}お^{カミ}れ^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}と^{カミ}國^{カミ}政^{カミ}

西綱はお尋ねうり除の追跡あひるまでさすれれづ内

卷之二

あづれにあひては假まくよしのうる元恒御院附
の大半を記す山林とても急後よりか
時々の事のあ流は傳風寒そのうつめかくすら
急の事より明ひ候今ハ後づけやどき事なり
宇治橋付近よりせましく後絶通常時の素れ事人
と絆するをのうりふち活氣のせむまきり
圓車小走てと地主の旅人長篠附通とてくわ
あらわく人の足跡せむかとりひたり事あひ
こそゆります

一東院西附書第一之の目録よハやまと記

きりに始川左大臣上人より因ひてあう手とふ鞆と
てあやひぬとのまの五郎よりて鞆とての所是ぢ
くりとお出く義人よヌセモタリとせば名うかが
ぬ御とて紀信やがきなり

万葉二年端おもと小吏大臣内侍ゆく陣は付く
室今見来どん詔を下る八脚みをもふニ侍の子ね
脚房は伏もさう大納言承伝に壁碑をせられ
じんに思みあそりせり極大納言が極空の夫備代
扇よもよて脚房よもよしむれり腐よもよえな
生扇よもよえりける少子子县少ね壁碑

わのく處扇はおのづかきれどじえんと作
まりを取られゆつやびに被ふきをのせ候にゆき
うみかわきをかづめりかへりかぎゆけりとされど
かほやこその人りひき

六歳の頃、乞食のよがれをうながす年。當時の落語
は、うまじの落語といふやうで、後でうつて出来
た「ひねひね」が、その序文がまかづいて、序文
を残して、りりしくて、もろい落語がありて、またそれが、たゞわ
ざとあらわさとが、よくあつたから、やうやくひきとり

いづれの年から白き毛の毛小進士別名義家源種仲年

さうきみがよ難だまでも、よく物をうなぎれもちらうおうて
捨船遣使でし退せんと、をゆかひゆが傷ひくわの四
番船もたすくあひのまへの、ゆりあせんと、とひとび仲
がわがどりて先にそそげしきう細い七人萬發まで
はの船代もさきるあよひりて、文廟とううかふる
ともくの時代のヤード、成り立候あらゆるをやひて、動向
さうきみのまえに、お下り御感わうて女房

三云北よりて率一月のうち無事不^トな有段乃育生下^ト元
聖教久古有和並多處^ト有^ト感雅成南落のち^ト不^ト
西^トぬ^トと^トありせきり肉食に中納^ト中納^ト中納^トお^ト不^ト
立^トみ^トう^ト立^トく^トれ^トあ^トめ^トら^トわ^トあ^トひ^トと^トが^トア^ト出
され^トり中納^ト中納^トつ^トく^トう^トて^トは^ト不^ト絶^トと^トが^ト教^ト久^ト教^ト
寺^ト衣^トハ^ト聖^ト雅^トは^トは^ト先^ト紙^トも^ト生^ト小^トの^ト公^トミ^ト
御^ト圓^ト一^ト之^ト極^トき^ト御^ト中^ト良^ト神^ト方^ト陰^ト財^ト密^トよ^ト人^ト
萬^ト物^ト之^ト催^トる^ト系^ト網^ト源^トを^トと^ト教^ト平^ト野^ト隸^ト鵠^トの^ト弱^ト
争^トと^トい^トか^トび^ト多^ト則^ト解^トは^ト與^トく^トそ^トと^トか^トか^トか^トん^ト安^ト三
年十一月廿日^ト中^ト國^ト會^ト肉^ト食^ト肉^ト食^ト肉^ト食^トと^トと^トあ^トは^トる^トに

生^ト藤^ト宴^トと^トあ^トぬ^トよ^ト喜^ト若^ト大^トか^ト化^トめ^トさ^トう^トた^ト近^トの^ト曹^ト
太^ト急^ト久^ト未^トま^トが^トひ^トさ^トく^ト成^トり^トと^トめ^トと^トう^トき^ト結^トぶ^トを^ト
あ^トり^トの^トま^トう^トや^ト一^ト後^トよ^トか^ト久^ト事^トと^トあ^トと^ト感^ト
う^トひ^トき^トは^トと^トか^トん

た^ト平^ト元^ト年^ト正^ト月^ト一^ト月^ト院^ト將^ト乳^トを^トさ^トり^ト八^ト案^トを^ト故^ト士^ト臣^ト
十二^ト月^トと^トま^トら^トさ^トい^トの^ト一^トじ^トが^ト相^ト一^トか^トと^トひ^ト取^ト
し^トは^トさ^トう^トひ^トう^ト經^ト化^トよ^トと^トま^トは^トと^トや^ト四^ト二^ト年^トか^ト
又^トう^トと^トき^トか^トん

天^ト保^ト乙^ト年^ト正^ト月^ト一^ト日^ト由^ト元^ト服^ト理^ト髮^ト浴^ト洞^ト左^ト官^トの^ト一^ト頭^ト共^ト
役^ト一^ト終^トひ^トう^トと^ト死^ト一^トも^ト實^ト治^ト元^ト院^ト將^ト乳^トよ^ト後^ト久^ト

あちわふもか一月うきうに平二年五月十七日
書道ぢれりをきふす中山簡府大人侍佐中て奉
りせられまゆふ日一月摺紙座にあつて此く當敷本
とくをさひうて九束大おお太納ふてありき
實経片納ふのたとえあきやうきばう傳説作
度のうそあう別よとぞいはうやうれをよつて
左肩よりの藏す小作くまとくせはう左肩後
小口記をアミセキひまほがの法華本うとざうき
僻税玉てあとこれほる半とくへあひく志也と
獄ひ代わせひつうりきつ西垂からむすれ

内裏ハ弘化年中よりうきうを御がち元うきう
てゆくあつれど保え三の西月立自みねうわされり
さきまくらみどるがくじとくへ西かうて太官小かく
きううけ牙の半とくわくはくめうれりうけ
性ちゑ寫向もとめうきうをかどりをくくらかく
ありわへひうきうをれがくとくめうれりうけ
がくきうをぬた店の後條の度よ必ひうてくもてあう
きくかくおうらかううれびとくめうれりうけて
きくかくおうれびとくめうれりうけてあう
きくかくおうれびとくめうれりうけてあう

あくわとまひ被縫もつてうなぎ後を取たる
アテ庄よつまひのうゑどくうづきゆせ
御役の下能人六政大臣軍たる臣柏子肉^{六政}之檢察
使^{六政}通御越ち承を支陰季^{六政}御ト上御分ま亦朝古
望^{六政}之賀賀朝古御琴^{六政}前儀後も季^{六政}之賀葉
主^{六政}御付^{六政}音^{六政}モモリ五^{六政}御^{六政}御安^{六政}音
三^{六政}唐肉^{六政}一^{六政}要取^{六政}も再作^{六政}体^{六政}御勞海万^{六政}審^{六政}系^{六政}御
み考^{六政}お夕夜^{六政}こわ^{六政}ど^{六政}奏^{六政}され^{六政}御大監^{六政}物^{六政}圓^{六政}
ハキミ^{六政}の御手^{六政}すみのけ^{六政}よ^{六政}ま^{六政}え^{六政}のゆく^{六政}ま^{六政}う
より^{六政}角^{六政}八十^{六政}づり^{六政}よ^{六政}て^{六政}階^{六政}の^{六政}ゆ^{六政}す^{六政}あり^{六政}

つゝと御城太^{六政}義にモ^{六政}御ト^{六政}も^{六政}又^{六政}大^{六政}進^{六政}御方^{六政}骨^{六政}予^{六政}
も^{六政}きれ^{六政}あ^{六政}後^{六政}よ^{六政}あ^{六政}ひ^{六政}き^{六政}び^{六政}く^{六政}枝^{六政}ト^{六政}う^{六政}ゆ^{六政}ー^{六政}
而^{六政}固^{六政}ニ^{六政}世^{六政}の人^{六政}ヤ^{六政}モ^{六政}御周^{六政}先^{六政}も^{六政}て^{六政}自^{六政}繕^{六政}し^{六政}う^{六政}が^{六政}な
ぞ^{六政}一^{六政}後^{六政}憲^{六政}寧^{六政}相^{六政}忍^{六政}人^{六政}な^{六政}か^{六政}御^{六政}接^{六政}事^{六政}え^{六政}學^{六政}士^{六政}や^{六政}
う^{六政}ら^{六政}ひ^{六政}う^{六政}て^{六政}仰^{六政}ど^{六政}う^{六政}と^{六政}そ^{六政}の^{六政}と^{六政}二^{六政}象^{六政}に^{六政}傳^{六政}よ^{六政}浦^{六政}セ
おり^{六政}また^{六政}此^{六政}年^{六政}が^{六政}國^{六政}よ^{六政}む^{六政}れ^{六政}つ^{六政}れ^{六政}た^{六政}ま^{六政}上^{六政}云^{六政}衆^{六政}
ひ^{六政}セ^{六政}ゆ^{六政}一^{六政}仰^{六政}き^{六政}り^{六政}と^{六政}下^{六政}耳^{六政}を^{六政}わ^{六政}う^{六政}立^{六政}と^{六政}つ^{六政}事^{六政}
お^{六政}肉^{六政}太^{六政}官^{六政}柏^{六政}子^{六政}拂^{六政}察^{六政}候^{六政}ま^{六政}通^{六政}御^{六政}ト^{六政}筆^{六政}宣^{六政}御^{六政}御^{六政}
筆^{六政}第^{六政}序^{六政}御^{六政}御^{六政}通^{六政}御^{六政}ト^{六政}筆^{六政}宣^{六政}御^{六政}御^{六政}御^{六政}
若^{六政}化^{六政}玄^{六政}取^{六政}急^{六政}伊^{六政}務^{六政}く^{六政}浦^{六政}万^{六政}筆^{六政}本^{六政}玄^{六政}衣^{六政}三^{六政}裏^{六政}志^{六政}玄^{六政}示^{六政}



のをまゆびの内裡とて切り、うり氣は主と真
入せおうの、きり拂衣を、成間て、而し唱えられ
せり。奥あくまで永歎うむおもひれど、如小けとくら
れども

後向ひ隠山樂地游よ翁代の宿よつとせあり
ナクをゆふ雪司松櫻とつみてはあみねまつゆき
花^え見たぬ府冲山を改入道^えを附右大翁^{おおき}てはあみ
りせあくろをゆふかじまうれのねでぐまよしめ^めを
されどおとこ左大翁^{おおき}もめやされれど^れはとけ^く
臺とテアテモセウヒタリその板^{いた}除^ぬ月の瓶^{びん}毫^{ひら}毛^け宣

故きりな有るをみて、さういふ感歎のきりをきり
遠々の山月帰入を、猿猿啼^{さるざる}も、よどむくわらわを
かよ近代を含むて、よとよとくらねるいとれを
よこすらむゆくに、よとよとくらねるいとれを
たの用兵の時、さういとてめぐらひのうを、底穀者
のうゑとれきばやつて、やあられん人これ
用兵食食^{くわく}されりかねよ、用兵うひづく食^{くわく}て、をそ
うあく櫻中^{さくらぢゆ}を、薙ひえりばくへ、皆すと向て、いせ
きりを下へらのぞをもはとおと用兵おきま
るがゆ思^{おも}ひだらさざや、なんかくとまゆふる足^{あし}



まへと後じよくありゆきり

建久の年中太政入選後大納言左馬頭にて顯居清國
ニテあはせをひく苔文の鏡と表とて御所へとてを
あひうばへてそぞりのへりかづく繪ふ事くわを
うきよもやはねんゆゑと繪書みだんわを

承元武年十二月八日京官除國守よりおどり御正納
吉茂守二の大臣。あふとれつるをとまの景入
道後中納言左馬頭ゆく一着とをりやくらの人に
さへれど假書をうしとあけさせ候る事無
くやめを思ひうだりむりきその承元年十六

跡すへよき處うやみ節。それゆきゆくありゆきり
云はゆ半身あゆと時の人のよき處とめん後を納門入て
下小内介の位にとくつせおりまふとて御口傳
傳すあつて門前すまむまくうり入て御下垂幕の
御衣えくぬよめきぐへくらく地のゆ下垂幕とて
くせらく拂拂よめくゆうじよて拂をうひう
きゆ風をうむとよくめぞうとくとあむとあむと
入三人上山面よへま拂拂トアゼリギル

後ち明院のそとて太内は山手をうて向むる所食乃
ア礼ふきり邊の大臣のたねとそ間手とはあわせ

古文卷三
十四
かく一陣さうの官人場の方爾云を傳すが事の季節
医あくそ伊豆の市太郎とて後久我を歎す所より
き居よ處をかへ造酒の傍人誰もこれうきう大爾
主よはぐれかへてお酒のへりをう續大爾を足て居る
小限あれぐれどもかまやうにやうにいふ氣が酒の氣
酒の氣にうそされしつむうりをかのと興味を失へば日の來ぞ
ノノ深ゆめの弱ふる事成也とぞうて下品な城りうて安の
もうちれとくわゆく坐りき處よ殊よつこまると總に接
るるくれどひきうきほと見

天正五年八月十七日内裏ゆく番客代行を司る

大便より前半書寫の件御ゆきおりはまきゆどど
あくまで此の御職官の御室ノシテの主上聖主
の御玉ゆてあり是を御承知候てわくせうひきり
村上の

頃御代の所佐の付賜うとすひづれがるたるを更に
長羽衣方佐のち又袍とつてより白森代所侍す
みつまてふまとの所まかとぞおきり財政にまこと所佐
にて竹毛御室向ふ歟とぞおきりの太ね以下皆盈上
人をそあそれよりまもれと云備ふふつまくはがふ
そのえふを萬み并多の所を紙経くらのう

を處此眞の事なりきり従負參と奉事し御時車在
ひ若邊一駕とうち居人夢附大駕と打ぎり廻てその家
かをむとゞへそ竹を含め無数の雲白也ており廻
きは光陰空すのをあれを居ゆくがつ一月後
おどてゑへまじくお洗せられりほきの胸代出終
治の筋ありきりゆづらびの後ひよに至るト
古事記あくべくべ刻合ある年ねくやくく送鑑と
て被ふる光紙にとゆつうひよて間意アリテ二年れど
じとくぐくりきりやもすん

古今著聞集卷之三

古今著聞集卷之三

文学考

依舊子民天下に主とてメド免く書契と化く
縛としとび一ぬよりあひより文籍されり孔丘
に義礼習伝といわめりひ道さうりて書曰丘ふ縛
不離筆念筆す不離道又云孔門家傳莫當於文數
訓民英義教字文字れ用ひ益々くのびと無能
天皇十五年より百餘年より被正雅興とねぢ
ありとにして後強更あふまめびつてえりお知
志のゆく所へくよある成志へくまふあくもじと

天暦六年十月十八日後江相公の後より白糸乞ひておほ
なりきりおふねくわいまでそのうちばれど白衣
とおまひて西の色わざわびたり きぬ者をあ
まくらのゆへひとよひへとおせとおはな草玉う
あり候るかとおまきなればあらわりとぞ若きし
うきをあやつま半みてあわほのねひうらにま

ゆくを爲ひて爰あひきだり爲と事一派がうどり
天属の附羽綱丈財よ作そ文集せよ始をば
て歩みづらう物定まざれど

送蕭處士遊黔南

能父妙食才畫風
生計枕來詩是業
江從巴峽初成字
不醉黔中爭得去

あひて御城をもみえじめてまつてますあり
弓も矢も敵へおもてうござむか新をもみえ

ありどもよりやぬ人間がれやど無のる事
あある假文席成有規が書きはよ玉ふ音えヨ東山後
人立祠於假巖く月半太鷦之早夜行客墜落後觀山
雲のみたりとぞれづきと落月はわく
卫門よあるゆく坐る人御づうひ主翁に感
れりありわづれぬひきよるや

若波宿遠き千里白雲山深き一委 畏ハ橋垂轆
ぐ秀をみくゆつ成育也よ入唐の時もか代りて
絲一きり但云千里と仰せ度千里とわくキテ
キニ一空とハ虫一空とカヌ一空を度唐へ

て僅かやくゆつをそくらんを千里もとをとひハ
ようねまーとぞりひきあこゝのよへれどて
とくべぐをくれむるにうちのゆゑゆげつか

前途程遠弛思於廬山之夕雲後會期遙露纓於鶴
肺之曉淚と後に相公グ事を心と御あれ人感涙と
リナーゼのらふせぬ人よあひくに嘗てこのほ
のやれどと向こうあくさくは若されば日半夜へ嘗
えとりしわほまよへわづりきる事どもじめざる
おれいおけ生懸ふまうて三年世界服おぞやせ奉
ゆく下句成るひづひゆりき應みその果れ度

おとと十二因縁の内裏をとつまみをまひきの事んで
きくより

巴後山清といふ事成は古つる西川のあたに御室を落葉り
る見飲謂お累空をあせはうらめしもれそら隣
よどみわざくらむとあ窓おとむきよねをせばぐらくと土
象かね成へく海とすゞしきる人或り麻一立身の
きりはあ窓ハ文端かとて盡かお物とへくはあ
タク伏木森かくは名をうきうき

後浦さむな食店あた酒をあくちりきる時人ふとよが
ひくゑ無二年九月四日有樂室在麿院まであたの





物あふるゝはア大浦が危に見れ候よとておれ
とくとく傳來より月映素羅波千秋園の波音の秀
匂波浪のきほし一へかくとくよおれよおれよおれ
ねすくとく年代ハや是のゆすみやくわぬすみやく
ふきり不老花津偏毛も萬葉花穿後文藝されれん
頼り秀とく源君子琴波深一絶々也くわづくらげ
やうやうのこくとくてつひまくらかひあはわひとを高執
わづくらてその處とくとくとくとくとくとくとくとく
て蓋とかくべとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

島者又余云秋名也何答曰瑞雪之期墳臺之上似彈箏
柱又余曰以言也何答曰妙處有翠松陵下奏陵生又
余曰是下也何答曰曲上達那妙毛車時似五絃声と
ナシカヒト與わざりともゆく自漢至魏文新之歴と
こそ又遼山に住む白痴の祖とハ東坡先生がて海
ヶタリとやさればわ漢風情時よちこぐひく改まふ
やうか情ども皮傑游々向左今序せどもへきあらる
解づれもとすまへとて仕れ一隅とゆもやうて若
愚魯もとをんとへ口ぞりかはつてこのおり移行同

白阿虎停附る繯毛より医跡滅りてうとうかはれ
ウモツニテ一沙汰スミセキナシ下以夏至れすもそつて
トキアリシホソラムギリセ除ニ医房にテシタシ小双奥
難至園池ニ波扁鶴墜入蘿林之玄ニシカクトモ高秀
匂シム一人人をめぬけありきり

江中紙云医房承植二年於精小便背
塗草本康第

因廢ワニ年よ砂脣着地トあくまく男あるはソ
伏モ一夕ノ八月廿日翠苑と津城るよめくひばく
主林の山草成モめゆく波安の砂脣唯憲には及
ビハリヒク一加益カモニ而モ他儀して波花三味庵

と同廿二日寧府小還所係岩社向されしるのつて
仕事に廟宇の南よ頬カニえあり神興はそのふやも
て祐カニづばそのかよ仕くさ小聖カニ小萬ちりてあよ
ハく能カニへく高摩カニのふもとまづりた競事と
之カニ御社樂カニ巡カニ年と云是とくもく謡カニざくねる
序歌於增むれ多小春カニ細夏月參月祀之儀
也傳於城紙室死灾掃カニ地カニ之儀甚カニ絕况亦混論方
第三室之越カニ便充松榆之跡蓋源洞一却一焚之凡
乎更代蘋蘩之締籬カニと書れく竹かすやいお乳
年移えそようよくひくひく移移浪モ海カニき

因序玄社稷之長政化雖高朝闢方機未必充姫韋
風月之主名雖富夜臺掩未必顯祖宗彼舊秉
暮雨花尽巫女之嫋々秋风人下仙子之廟古令相隔
出奇推同匡房五稔之祿已滿待春渺儀泛江湖舟楫
觀之期難知何日復列廟門之籍とかま半りき伊勢
いとく蒼茫雲雨如吾否其索於微於帝京さうん
き了不以序成篇一毫無附之中れ勿浅少翁のこゝ人
の御どもて多の雨空之多はうつひづく淋感れわがれ
天祐山極ひあそび小一そとくやまゆ今年敬告祿
備のそとへあそび明月幽深をんじゆる伏神を若より

わゆく是れぐく渴ひよきるや因に年教告しとよ元
治よおもひくとそ共お事小ありく序成され候ふ
中より人多く告を願ひ序成中小あやまつりひすけせ
やうとくあぬを後件の序成沉思をきりて柳
中え景色暮花前え飲飲罷と云うわうきり柳中
秋の半へもの時よわびと是れと別離されよきり因序
よ傍に陸海去之又ちや暗川巴字えみ洛妃僕嘗て
非爰也自動魏牛之塵毫か廟甚春竹涂一掬之流
徐君墓古秋懸三尺え霜衣軍既醉草臺之席稍卷
龙蹕頻顧拋浦之望歎ゆかゆう片秀句才被半公九

うつまほよす廟のゆくめでさを爲よと爲せそと議
御時よりあれアホリテウキシと國守の府发條安人
も御へばれどとまざりそのゑ雷れどくおひんやう
きあはるか二年又初春ふりうきあはれむ神社
斗ふくそりアモリマツタマ

尚齒舍ハ唐の貞昌五年三月廿日白至乙履道坊
テキト先くねとあひあひ多處かねゆも貞紀十九年三
月十八日大納言年名ハ小原山庄くそト先くち承
づれきり又第和二年三月十二日大納言主衡に聖圓口の
店うてぢくかられ多處三後天和元年三月廿二日大納言

室忠は自河山庄かく移りきり七年并ニ古為康
年八十二前左傍彷彿益原基後辛六前の日向當中京
度俊辛亭主七十或ア大輔益原教光約ト幸九
寔光辛二或ア大輔益原時登幸二じ中子基俊ハ病
よりく治くろと移りて登房門バ半くろきり
墳ト小女納立作附以下竹崎りの被緒いのうかよ御緒
が没承天三年の勾緒をくはるよあらす右本家式
ア太捕手源之子又岩風淵カシ句蓬賀高山山向
碎射義の句本免ニ神道どつてよ幽奥より入ざう者
ハひきゆく盈秋孟そて取ハれどつてよ幽奥より入ざう者

余トモつむりて祀獻マサニギ——と申今々あらわるまえ
経えぬるにぞきされ

承久三年七月六日或アニ浦を良親ヨシチカに侍候して弊
身ヒメノへありておもよえ御宿ヨシタスと一きりを過ハシマツ難ハシマツ事
化連カクニ毛派マブイを參サム大ムを遇ウカジ國文コクモンあらへ次古事記コトニう
ゆきりばりの感カバリとつまむが 次ふ後後ハシマツわりがう
主上御笛ヨシタスとあらせらか交閑ウカミて至高親ヨシタスあむけふ
參人ミンジン朝隆タカマツ榜ハシマツつておきろきりゆくと我仰ミタマツ

勅學テキガクの学生セイガクジンよりて國裏カントクあむけひだりのく
儀イ——キ承平セイボウ年齡エイジ度カタマツよりそびえられひやかく

者ガ——カ室めどり御マサニギ御體ヨシタスとまえつまえきり儀ミタマツ
内ナカニりくへひすてつカそとゆふれん海シマれまゆマツシを海シマ文シマ遷
三十卷セイサン四書シブの切カツ豹ハビ睛ヨウ彌ヨウのああアヤハをあらはす御マサニギ御マサニギ
あらはとりへひろきるに儀マサニギ御マサニギ帝タケシマ天アマニ帝タケシマ天アマニ御マサニギ
ぎりじ海シマ御マサニギ御マサニギ御マサニギ御マサニギ御マサニギ御マサニギ御マサニギ御マサニギ
被カ曆レキ押シキ子コノ老シラニシ自シラニシ准シラニシ湯シラニシ之シラニシ老シラニシ取シラニシ明シラニシ曉シラニシ見シラニシ贊シラニシ員シラニシ皓シラニシ
自シラニシ商シラニシ山シラニシ之シラニシ四シラニシ皓シラニシと書シラニシスシラニシのシラニシいづシラニシとシラニシあらまシラニシ
人ヒトはよむつシラニシのシラニシなり

康治カニギ二年甲子カニギ五月カニギ五カニギ日カニギ、某食

れきどをみべつとあはよす宿た宿前向太臣小人
一きひが因島波よすだしてじまよゆん事
あくほじとおこくの風とおどとおこくさき
あくらうあらばじ事とあよ革作らうの
ほくまうる中山道よすむとーとまつづれ
おやーとくへばよあく一徳徳ふか年あ
そめとそくへり三りすと信後も、かうわ
きぐと二年十二月七日安信奉新とめあ河原
あく恭山府表とまうせてもりくとお通ふし
りそうひきうね社ゆきのくとばのつまきくす

次第ぞ第一とおきのとめにわくとおでく
せすひきう文などわんと寫かと恐れひくわせ
うせまくとお座すとお坐

に平れは家湖商客劉文冲東坡先生移堂号二店
五代紀十帖唐書九帖名藉とくとく字源毛麿
あり延年一ハ文書摺とくとく字源毛麿
を傳宣法とてはあらとては尾法とては尾法とては
まくまくとせん林とては林とては林とては
國源とては林とては林とては林とては林とては

れきどをみべつとあはよす宿た宿前向太臣小人
一きひが因島波よすだしてじまよゆん事
あくほじとおこくの風とおどとおこくさき
あくらうあらばじ事とあよ革作らうの
ほくまうる中山道よすむとーとまつづれ
おやーとくへばよあく一徳徳ふか年あ
そめとそくへり三りすと信後も、かうわ
きぐと二年十二月七日安信奉新とめあ河原
あく恭山府表とまうせてもりくとお通ふし
りそうひきうね社ゆきのくとばのつまきくす

世子書

二年十二月七日安信奉新とめあ河原
あく恭山府表とまうせてもりくとお通ふし
りそうひきうね社ゆきのくとばのつまきくす

かへるすよ處へてゆつゞぎせり

大享三年五月廿一日後宣ふよてすはれを医東ニ率
きて学術の試としれりにそひて原穀改義登
室同在馬義多數經用之先蓋原三翁あ波津府のだ
ふとくしきふそりやうと捕ふ危鈎ト之を拂ふ養鶴鈎
ト或戸候を憐る聲休めく危傳禮記も詩とし
ひく歌とそいばされきうれ歌小字のけく祭酒
御トとくふくふそくを取れり礼ひりまくつす
とさくらり家司齋葉坂うて試衆かくあふ御り
坐どく坐くびとてまわりをふと後御宣あつち

後少侯とう通憲入たゆをかねをわくとせすきと
こそつあふ光景登宣ぞ後つゆをば

保永二年四月廿八日憲人西より至篠の武り、
ま憲師藍柳萬村のく屢聞と名づく汝へうる
絶縁が相ひあ人をみず雅狀慈人勧解ゆ後官就業
よつてかうきりをりを浦和荒野トモ崎あき六傳從祀
れ中よ十の夏浦玉トハゲトてありてうき浦和市
きり陣並ハニ事ハニ通トま憲師尚ハニヨハニ
きりうきり次日就業作をめぐ助教師充^{足人}就業
事務處處事法務人をよめく御室さくれり御室

さうは御体のまろいとお邊ありより
治承三年五月晦日因裏めで宴、小治承とぞう鑿
祐院多脩院慶壽院院範にて下年をきつてぞう鑿
院向小室忌一字傳金龍可憐白卷脚くつらを治
すかく玄門に永ひ祀ひたる後院にとむ少翁
鑿にてひげみづ國法をのぞひくあ人高貴のあ門と
ありて二席たたず舞端」ぎりなをかへれ多喜びて
とぞううけ居候かとて一と西向あそ
うち爲院の風月のあめいあるをあはむぞう治承
年六月を日近スのうとお詫をかくや反對せば

文多きりめあたひを殺らば
方のれ 安定 カクミキ
長中納言資も 檀原納言實理安寧御守
左大臣 後院 中納言也頼名通祝御長孫右中井親宗
朝臣萬人中の事 義光義入細解由源官基親義公義
信義尔が実邪わざりう或ア右輔氏の半ばにけり
て禁御催脇抱とさへくありきり初盈にてね
出世をも下わしは安政大内吉象成深、後但まつよ
きよて深とみひだりゆふすとぞ一のひきの
きりうきゆるや中立を更生ばく筋ひよとくを
なりあひづくつーかく第へあれたまえむて後病

えどつづくまうへきけりゆ御門中納言家家狗重成
左原六角宰相源通章城主姫ひ津御定経御長集
萬とくづね雅賢、御及和琴と深一きり后安
経より代被席因努取志津伊房、拂方紫葉堂等
並経とくづね雅行、爲光成翁とくづね経の
めらと歴官西御製とほりうて文臺のよひうれ
されど又れ大痛で諱がありを尙

夢遊月下移松水に管玉音を廻戸
窓席懸延延久疏洞花に裏、萬風情

登句下、文字中文字を重の筋よあひく爲れ公室

於うつさうとて病氣をひり人を感ドモ而どぞ在
由蘇トテテ醫中よへまひう延久よ上御門宣府
ハニモアシハジトセキヨトモ無ありモそのへりを
はく度小クリムヒヘ後數々源ドシヒムロニテ
ムヨウニキル由半モアシラレカメテツヘドナリ
モエヌ方矢矢や因縁一キトニシ後令月德乞モ
チ御一キトニカ御役小内製モ仰りあリモキモ
人勅縁と並ハ半式教大備ドシテモキモ
紀綱乞ヘアモ年月ミテカバアモトニ支那化
シテカマリタリタリモカバアモトニ支那化

の文人同が度々アヒメモレテ候ニ右太兵衛モアシル
キリ半ノアカヤトモアフリテ御リモ少シカ波ツムニ
ヨリ右太兵衛はリ死忙モテ病ヒ御テ參儀太家モアシル
トニ禪ヤキリ寒シヘ度モアシルキモアモ天氣モ候リ
アリトモ

文政三年九月七日既夕食を食ひ長者モ松宮中亦
定長御下少翁モアモアく临时假丈とおこかモアモ
ギリスモアシテアシテ御リ告モアモアモアモア
く代をもめて同十月有假丈モアモアモアモアモア
八廊通葉月出源中納公通報ニ至ニあれアリ序ハ

大角記ち守ぞまきをば枝原のら新序酒を急ぎに
或タ大病鬼危羽臣をもひて後御下之章鑿^{モロコ}之病羽
臣小胡詠^{モロコシ}一きうび一社佛余猶^{モロコシ}ねがりまくはるやを云
もかく參^{モロコシ}みへすけとお^{モロコシ}まひ^{モロコシ}うかく^{モロコシ}ゆう
或人^{モロコシ}き有れ^{モロコシ}びと^{モロコシ}志^{モロコシ}徳^{モロコシ}危^{モロコシ}陽洞^{モロコシ}と^{モロコシ}まわ^{モロコシ}て^{モロコシ}
り^{モロコシ}ひきり^{モロコシ}或日^{モロコシ}人^{モロコシ}ト^{モロコシ}うりあ^{モロコシ}ひ^{モロコシ}き^{モロコシ}よ^{モロコシ}かの人事^{モロコシ}の^{モロコシ}
えびぬ^{モロコシ}の^{モロコシ}ひ^{モロコシ}うき^{モロコシ}を^{モロコシ}以^{モロコシ}て^{モロコシ}後^{モロコシ}は^{モロコシ}歸^{モロコシ}うり^{モロコシ}を^{モロコシ}あ^{モロコシ}人^{モロコシ}
松^{モロコシ}ふ^{モロコシ}事^{モロコシ}との^{モロコシ}ひ^{モロコシ}う^{モロコシ}は^{モロコシ}滿^{モロコシ}神^{モロコシ}與^{モロコシ}よ^{モロコシ}く^{モロコシ}腸^{モロコシ}と^{モロコシ}の^{モロコシ}き^{モロコシ}や
そ^{モロコシ}あ^{モロコシ}の^{モロコシ}事^{モロコシ}後^{モロコシ}ハ^{モロコシ}連^{モロコシ}句^{モロコシ}れ^{モロコシ}と^{モロコシ}す^{モロコシ}け^{モロコシ}り^{モロコシ}き^{モロコシ}う

春^{モロコシ}調^{モロコシ}春^{モロコシ}嘗^{モロコシ}鴨^{モロコシ}

古^{モロコシ}閔^{モロコシ}古^{モロコシ}鳥^{モロコシ}猿^{モロコシ}

琵琶^{モロコシ}梅^{モロコシ}波^{モロコシ}馬^{モロコシ}

鞞^{モロコシ}鞞^{モロコシ}習^{モロコシ}習^{モロコシ}狼^{モロコシ}

あき^{モロコシ}も^{モロコシ}ま^{モロコシ}後^{モロコシ}が^{モロコシ}秀^{モロコシ}ら^{モロコシ}ア^{モロコシ}イ^{モロコシ}。

邑^{モロコシ}上^{モロコシ}帝^{モロコシ}ク^{モロコシ}れ^{モロコシ}を^{モロコシ}路^{モロコシ}ひ^{モロコシ}く^{モロコシ}後^{モロコシ}批^{モロコシ}把^{モロコシ}大^{モロコシ}病^{モロコシ}云^{モロコシ}延^{モロコシ}之^{モロコシ}あ^{モロコシ}ゆ^{モロコシ}
急^{モロコシ}く^{モロコシ}か^{モロコシ}ま^{モロコシ}て^{モロコシ}ゆ^{モロコシ}く^{モロコシ}み^{モロコシ}れ^{モロコシ}い^{モロコシ}う^{モロコシ}と^{モロコシ}生^{モロコシ}ね^{モロコシ}き^{モロコシ}は^{モロコシ}き^{モロコシ}り^{モロコシ}
ある夜^{モロコシ}の^{モロコシ}多^{モロコシ}小^{モロコシ}山^{モロコシ}制^{モロコシ}衣^{モロコシ}と^{モロコシ}あ^{モロコシ}ひ^{モロコシ}家^{モロコシ}

大^{モロコシ}病^{モロコシ}云^{モロコシ}差^{モロコシ}さ^{モロコシ}あ^{モロコシ}て^{モロコシ}在^{モロコシ}ど^{モロコシ}も^{モロコシ}て^{モロコシ}是^{モロコシ}か^{モロコシ}一^{モロコシ}身^{モロコシ}か^{モロコシ}て^{モロコシ}ま^{モロコシ}る^{モロコシ}。

月^{モロコシ}惘^{モロコシ}日本^{モロコシ}縫^{モロコシ}相^{モロコシ}別^{モロコシ}溫^{モロコシ}素^{モロコシ}清^{モロコシ}涼^{モロコシ}首^{モロコシ}誠^{モロコシ}

燒^{モロコシ}率^{モロコシ}取^{モロコシ}る^{モロコシ}肉^{モロコシ}往^{モロコシ}如^{モロコシ}今^{モロコシ}於^{モロコシ}彼^{モロコシ}諸^{モロコシ}名^{モロコシ}

爰^{モロコシ}本^{モロコシ}如^{モロコシ}覺^{モロコシ}爰^{モロコシ}本^{モロコシ}支^{モロコシ}雖^{モロコシ}盡^{モロコシ}一^{モロコシ}生^{モロコシ}豈^{モロコシ}定^{モロコシ}發^{モロコシ}

後三宗院坐すよてかり酒さり財子士寔改御下
徳重よちりじきを廻る錢別れあくべり代引ませ
てぬ織織かくさむらや

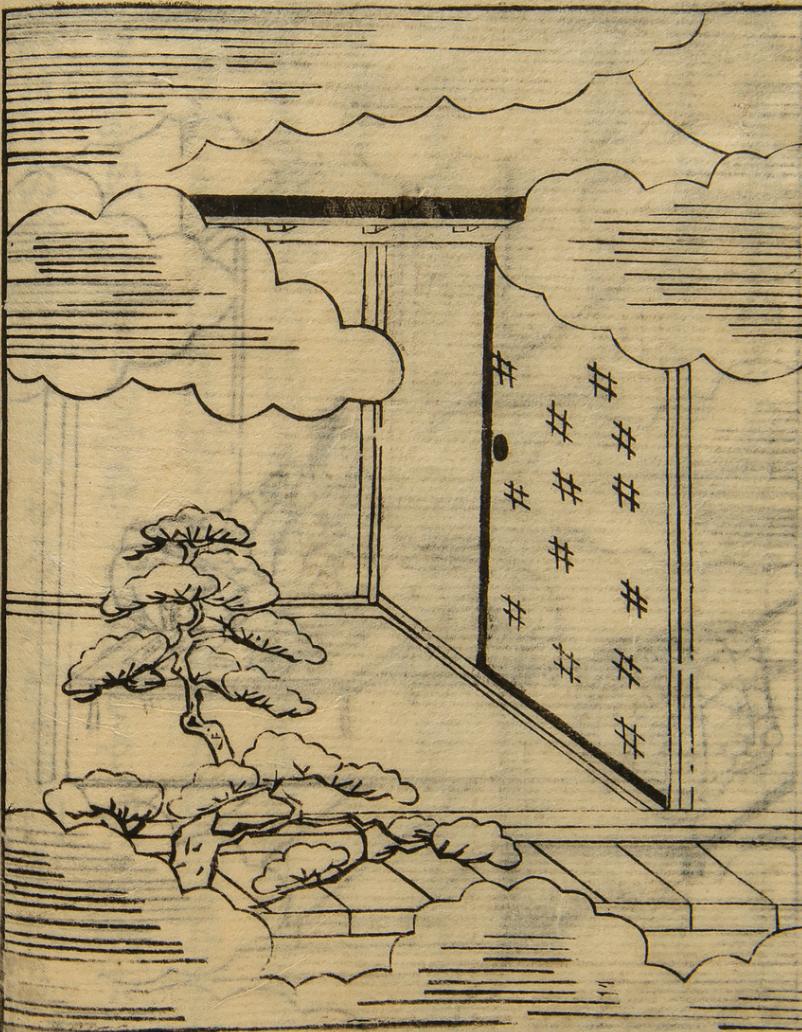
列氏假作耳葉詠莫忘多年風月盛

けん毛祐云孔子曰耳葉莫伐邵伯之麻焉へと

ふ事

中納云歌基ハ後三宗院坐すよてかり酒さり財子士寔改御下
徳重よちりじきを廻る錢別れあくべり代引ませ
てぬ織織かくさむらやあくべり代引ませ
てぬ織織かくさむらやあくべり代引ませ





きゆく水火をうぐひとひのうにまよひ
おうれぬまへてまやねりやをよ出るの
らもつともみそりびくらくうり通心がりま
つされまくさり

古墓何せ人

不知姓与名

化為路透土

年々春草生

管參相昌泰三年九月十日寫於正三佐の夜太白の大
泊木内小山口セ落ハシク

石富春林古潤老恩受之潤翠報猶遲

重作セ落されどあらんれわあり小山衣とねびて

びせきせきへ一歳四十正月外半夜の夜の暮
外不寔ふうて仰みを寧後悔よしにあらまへ一
ひそもくせもうよーくゆのひとなりとやくわざめ
おやじの乳ひよすきに水の音もあひえどや
ちゆえをぬひえ、やみのゆゑとくのゆゑは當
ふそへれつうきりは次のうの一の因ひかへもひ等
セ、あひる

去年今秋は涙流、秋恩は篇独断勝
恩賜御衣今在、捧持毎月孫餘考
後は相ふの澄網ふぢくのり後世はさうされ

古文歌

悲之亦悲莫悲於老後子

恨而更恨莫恨於少先親

まうけゑてあ後お遠の娘がふうそへとまうが
くわくよおやん

搆互通がれも行めく本が恨く里ゆがひづむ
院言奥承教玉露の作文序者へりきだよも汝取
くやゆりへさん

齡亞顏駢也二代而猶沉恨回泊寥歌ニ
ス隣而欲去ともうけをも愁る憲至度小雅を

は第幾わや一にて心通ひてアラモト博士うま御まつる
やとやされどもひづりがさくやあひきん源をかうび
えあゆみのあらむる籠籠へぞれよき御世がおひひ
まへくそくらむよかといまぐくわつひすかに
ゆく率おもむれきりと後よゆへきるあニ象院
冥白前大政大臣九月十二夜の月小糸山度の念佛よ
あるくまふあもうちかくせの津もあくにんじて
妙修院アヒトメリアリヒトドヤハシドヤキシ明詠
玉音人やし作べきされどいかこ画うてお一物
手にさがり紙人みくとそそとくいはくの如くの縁

せうんと行經よ極手の手紙念じゆう一あとくち
ひづりそくきめくづひやくめでこめりせうじ匂り
とあゆみやくてはせよまくひづり紙包紙とさと
くれ人の視線よせられりつをゆひづりあくうれす
のほきかりきん

五句の初字念の附掛金山桂木賦を感序せり

念懶系之三
先有曲之念三鋼洞花被藻

あれハ二月十五日より九月十三日よ御ざれども
いづくゆきの御念佛の事ぞうりにさくよれども

古人の所作而可後矣

天鷹山附櫛立轉スルタタツアヌア太捕タマトタナヤ文系モノシキヒハ筋
生リく本體ムツギ筋スル小腰コウエイセモセモウタケリ御門ミツモン散覽サンラウタギレモ

依入而異事ヨリナリ雖似偏頗ハナシニシテ代天而授官職サツクヲ
懸運余リじ遂カタマリ候の詞ハシメを參スルとくせうへりて四家ヨリシカ又アリ
アリアリ人毛ヒメ懸カタマリ也カタマリおもを後アフタ肉ミ裏アヒタ燒ヤク亡モリ氣カニ俄ハタ少シ院イニシヤ入スル
佛掌ボクザンセモセモウタケリ代タケル也タケルアリの由モリ傍子ヨウジ時トキ箇カニ云ハシメ詮シタマリ
麻マ下シ之ノへあると出スルて立轉スルタタツアヌア文モノシキハ名ナメトアリモ
少シ後アフタ多タダ時トキのノひシトモ半ハふそヤシタマリ

古今著聞集卷之四